

ふなばし能 熊坂



解説・司会
古典芸能解説者
元NHKアナウンサー
葛西 聖司



シテ 観世流能楽師
重要無形文化財総合指定保持者
松木 千俊

ふなばし能「熊坂」関連事業

ちよっとよりみちライブ vol.229
「うた」と「謡(うたい)」 ～ロックと能の共演～
日時：令和6年7月18日(木)
18時30分開演(18時開場)
会場：船橋市民文化創造館(きららホール)
申込不要、入場無料、定員250名
松木千俊さんをご出演されます。ぜひお越しください。

写真撮影：前島吉裕

令和6年9月22日(日) 午後3時30分開演
(午後1時開場)



入場料 全席指定

S席	一般	3,000円
	友の会会員	2,600円
	ペアチケット	5,400円
A席	一般	2,500円
	友の会会員	2,200円
	ペアチケット	4,600円
	高校生以下	500円

※未就学児は入場できません。

会場
船橋市民文化ホール

チケット発売日

令和6年6月18日(火) 午前10時より
※船橋市民文化創造館は翌日午前10時より
※窓口販売・発券は翌日午前10時より

チケット取扱い

船橋市民文化ホール 047-434-5555
※チケット受付時間(9:00~17:00/月曜休館)
船橋市民文化創造館(きららホール) 047-423-7261
※チケット受付時間(9:00~17:00/月の最終月曜休館)

公演当日、能楽の体験コーナーに
ご参加いただけます(要事前申込)

13時 謡の体験、面をかける体験
14時 お囃子(笛、小鼓、大鼓、太鼓)体験
※14時からの体験は見学の場合申込不要
※体験の際は白足袋か白ソックスをご用意下さい
※詳細はホームページをご覧ください

オンラインチケットシステムでの
ご購入はこちら!

船橋市民文化ホールチケット 検索

<https://piagettii.s2.e-get.jp/fnbsbkhall/pt/>



お申込み・お問合せ

船橋市民文化ホール (9:00~17:00/月曜休館)
〒273-0005 船橋市本町2-2-5 (JR・東武 船橋駅より徒歩7分、京成船橋駅より徒歩5分)
TEL 047-434-5555 ※当ホールに駐車場はありません。

主催 船橋市民文化ホール

ふなばし能

令和六年九月二十二日(日) 午後三時三十分始

於…船橋市民文化ホール

お話 葛西 聖司

15:30

15:50

熊坂

アイ里人 高澤 祐介

ワキ 旅僧 梅村 昌功

前シテ 僧 松木 千俊
後シテ 熊坂長範

大鼓 佃 良太郎 太鼓 大川 典良
小鼓 田邊 恭資 笛 斉藤 敦

後見 武田 祥照
武田 友志

地謡 松木 崇俊 武田 宗典
武田 崇史 清水 義也
高梨 万里 馬野 正基
佐川 勝貴 武田 文志

附祝言

終了予定 午後五時

あらすじ

諸国を放浪する旅の僧(ワキ)が、京都から東国へ向かう途中、美濃国青野ヶ原(岐阜県大垣市)を通りかかると、そこへ正体不明の僧(前シテ)が現れ、死者の弔いをしてほしいと頼まれます。旅僧は僧の住む庵まで案内され、中に入るとその異様さに気づきます。壁一面に武器が立て掛けてあるのです。不審に思い尋ねると、このあたりに出没する盗賊をこれで撃退するのだと説明します。

僧が旅僧に休むよう言うやいなや、庵は跡形もなく消えて、気づけば旅僧は草原の中の松の木陰に座っていたのでした。旅僧は幻を見せられていたのです。

旅僧が呆然としていたところへ青野ヶ原の里人(アイ)が現れます。里人は、昔この地で金売り吉次と牛若(のちの源義経)が泊まっている宿に盗賊の熊坂長範一味が押し入り、牛若に討たれたことを物語ります。里人は旅僧に、熊坂の弔いをするよう勧めて帰ります。

夜も更け、風が吹きささぶ中、松の木陰で旅僧が弔っていると、熊坂長範の亡霊(後シテ)が現れ、吉次たちの宿に押し入り牛若と死闘を繰り広げたことを、長刀をふるいながら語ります。

やがて夜明けが訪れます。熊坂の亡霊は、旅僧に自身の供養を頼むと、姿を消してしまいました。

見どころ

能には「静」の面と「動」の面があり、「松風」や「井筒」などの優美な曲が「静」の面を代表しているとすれば、この「熊坂」は、速さ、強さといった「動」の面を代表する曲だといえます。

前シテは「直面」といって能面を着けずに演じます。シテとワキが同じ僧の扮装をしているのも珍しい光景です。

後シテの熊坂には「長霊癒見」という目を見開き口を一字に結んだ、力感を湛えつつもどことなく愛嬌のある能面を用います。

この曲の眼目は何といても熊坂の長刀をふるっての語りであり、所作の大きさ、長刀さばきの鮮やかさが見どころとなります。

語りの中では、自らの強さを誇って「宙に掴んで微塵になし」と鬼をつかんで投げ飛ばす所作や、「折妻戸を小楯に取って」と長刀を背に隠し、開き戸を楯にして牛若を覗く所作が印象的です。

そして語り終り、僧に弔いを頼んで静かに消えていくところは、それまで縦横無尽に動き回っていた分、かえって哀れさを感じさせます。

「熊坂」と同じ題材の曲に「烏帽子折」がありますが、こちらは「現在能」といって、熊坂も牛若も生きていく人間として舞台上で登場し(盗賊一味も大勢登場します)、芝居のチャンバラのように戦います。

能サボ(株式会社檜書店)より抜粋

